

寅彦の情報あれこれ

【まんがで名作 寺田寅彦エッセイ集】

寺田寅彦の科学随筆まんが『これから科学者になる君へ』（2023年2月15日、KADOKAWA）が出版された。鎌田浩毅監修。

内容は、夏の小半日、茶碗の湯、電車の混雑について、こわいものの征服、津波と人間、藤の実、科学者とあたま、となっている。「保護者の方へ」によると寅彦のエッセイを理解しやすいように脚色し、子どもたちの目線で楽しめるまんがとしてえがいており、大人が読んでもハッとする視点や学べる要素が入っている、とのことである。



【書籍紹介】

☆滑志田隆『椿飛ぶ天地』（2023年5月30日、論創社）

著者は元毎日新聞記者で、俳人。2作が収載されているが、後半が表題の小説で、ほとんどは作者の体験のようだ。

漱石の〈落ちぎまに虻を伏せたる椿かな〉に惹かれ、自宅の椿の落下状態を観察する。高さ3m、幹回り33



cm、ヤブツバキとユキツバキの交雑種で八重椿とある。

『草枕』を読み、椿と虻のどちらが主役の句か、動作の主体は椿でも虻でもなく、作者自身ではなかろうか、と考える。

最後に俳句の師と共に高知に飛び、文学館を訪問している。タイプ打ちした落ち椿の英文論文を見学し、学芸員に資料を貰うなど親切に対応してもらっている。寺田記念館も訪れているが、そっけない。最後は寅彦論、俳句論になっている。

【中井久夫の文章と寅彦日記】

昨年（2022）8月に亡くなった精神科医の中井久夫は『アリアドネからの糸』（1997年、みすず書房）に次のように書いている。

〔症状というもの〕

「幻聴は一般に午後のほうが多く、特に四時から七時までが多いように思う。これは、昼の疲れが積もってくるのと、身体の体制が昼型から夜型に移る移行期だからであろう。昔から「逢う魔が刻」と言っていた時間である。疲労が重なっていても、まだリラックスできない時期である。むしろ警戒心が高まっている。八時まで待つと不安も消え、それに従って幻聴も消えるか、少なくとも弱まることが多いと私は思う。」

これは寅彦日記の「日のくれて行くのがいやだ。いっそ夜になってしまえばまだいい。」（大正9年10月6日、全集第21巻）を心理学的に分析した言葉のような気がする。寅彦が実感として書いているところが、やはり常人とは違うと思うのである。